

講演 1

葬送の現場における身体

第一生命経済研究所 小谷 みどり

1. 死体の様相

医療技術が発達していなかった時代は、死体の変化によって死亡を確認していた。柳田国男は、古くは遺体遺棄の習俗が一般的で、「常民まだ今日いうがごとき土葬なるものを行わなかった」（柳田p.629）と指摘している。『古事記』（712年）には、天若日子が亡くなった時の様子について、「そこに喪屋を作りて、河雁を岐佐理持とし、鷺を履持とし、翠鳥を御食人とし、雀を碓女とし、雉を哭女とし、かく行い定めて、日八日夜八夜を遊びき」とある。古代には、死体を喪屋に安置し、食事を供するなど、死者が活着しているかのごとく扱う殯がおこなわれていた。

一方、古事記では、黄泉の国は腐乱した死体に蛆がたかる汚い世界であると描かれているが、縄文時代においてもすでに屈葬がみられることから、死穢への恐れへの観念は、古代以前からすでにあり、死体の様相の変化からもたらされたものであったと考えられる。

さて、人が亡くなると、おおむね、次のような死体現象がみられる。

(1) 腐敗

死後1時間程度で腸内細菌が増殖し、腸内細菌の繁殖と胃腸の融解によって腐敗が進行し、腐敗ガスが発生する。

(2) 死後硬直

筋肉が硬化して関節が動かなくなる現象。死後2時間で硬直が発現し、10～12時間で最も硬直が強くなるが、その後、死後48時間が経過すると、腐敗の進行とともに硬直は解けていく（緩解開始）。

(3) 死斑

心臓が停止し血流が止まると、血管内の血液は下のほうに集まり、下になった部分の皮下の静脈に溜まった血液の色が、皮膚をとおして見えるのが死斑で、死後20～30分程度で出現する。死後4～5時間では体位を変化させると死斑が移動するが、20時間以上経過すると、死斑は固定する。

内臓が腐敗し始めると、死体はどのような様相となるのか。東京都監察医務院長であった上野正彦によれば、「細菌類が繁殖して、腐敗が加速しはじめる。腐敗ガスが発生し、ガス中に含まれる硫化水素が赤血球中のヘモグロビンと統合し、硫化ヘモグロビンと呼ばれるものになる。このとき血液は青く変色する。したがって、肉体も青みを帯びることになる。この状態を私たちは

「青鬼」と呼んでいる」という（上野pp. 60-61）。

そして「この状態より腐敗が進行すると皮膚も徐々に腐敗がはじまり、このとき皮膚が赤色に変わります。これを「赤鬼」といいます。水死体の土左衛門の状態で、この状態ではかなり腐乱臭がします。

この赤鬼からさらに腐敗が進行すると皮膚は液体になってずるずる溶け出し、死体は黒く変色します（「黒鬼」）。そして最後は白骨化して「白鬼」と化すわけです。つまり死体は、青→赤→黒→白の順に変化するわけです」（上野pp.61-62）と述べている。この「鬼」という表現は、腐敗した死体が視覚的にいかにおぞましい様相をしているかということを端的にあらわしている。

2. 現代の葬送における遺体の取り扱い

日本では、1935（昭和10）年に火葬率が50%を超え、現在では99.9%を占める世界でも有数の火葬大国である。昭和に入って以降、火葬が急速に普及していった背景には、都市化や伝染病による公衆衛生観念の発達もあるが、堀一郎は、死穢への恐怖観念が強かったことも指摘している（堀p.140）。上野の表現を借りれば、鬼にさせることなく、短期間で死体を白骨化するのが火葬であるといえる。

ところで、死体は客観的な身体の状態を指すのに対し、「遺体」とは「死んだ人の生前の社会的関係の脈絡の中で言及される場合に限って使われる」（波平p.19）。つまり、死体は三人称からみた総称であるが、遺体には、故人の生前の人格がともなうという認識がなされる。したがって、死体であれば火葬によって処理さえすればいいことになるが、亡くなって間もない遺体は、身体と霊魂が一体となった存在であるがゆえに、我々はなきがらに対してさまざまな儀礼をおこなう。

現在、死亡人口の9割近くが病院で亡くなっているが、医師によって死亡が確認されると、遺体の清拭がおこなわれる。最近では「エンゼルケア」と呼ばれる死後処置をする病院が増えていく。体液が漏れないように口、鼻、耳、肛門に脱脂綿を詰めたり、目や口を閉じ、女性の場合は、おしろい、頬紅、口紅などで薄化粧を施したりする。

こうしたエンゼルケアの考え方や方法は、なきがらを遺体と捉えるか、死体と捉えるかによって異なるのが現状で、たとえば、看護師が使い古した化粧品を死後処置に使用したり（故人の尊厳を守るという意味で問題）、あいた口をふさぐ方法を知らないために、ひもであごをしばったり、合掌させるために手をしばったりする（うっ血して、しばった部分に変色してしまうので問題）ことがある。脱脂綿の詰め方が悪く、体液が漏れたり、見栄えが悪い顔になったりすることもある。高齢女性に若者メイクを施す看護師もいる。家族を病室から出して、看護師だけで「作業する」病院もあれば、最近では、エンゼルケアをグリーンワークの一環と位置づけ、家族を積極的に関わらせる病院もある。

病院から運び出された後は、自宅や葬儀会館などで、納棺の儀式がおこなわれる。死に衣装に着替えさせ、死に化粧を施すにあたって、昨今では、ここでも葬儀社の社員や納棺師などのプロが主導するが、こうした傾向が顕著になるのは90年代以降のことである。

大正時代の家政学書には、医師に死亡診断書を書いてもらった後で、遺体の目と口を閉じさせ、衣類を脱がせ、消毒薬で全身をぬぐい清め、衣服を着替えさせ、容態が醜くないように白布で遺体を被うといった手順が記されており、遺体処置は、家族や近親者がおこなう作業であったことがわかる（『家政講話』『応用家事教科書』など）。

しかも、かつては死穢を鎮めるために遺体に対して儀礼がおこなわれていたが、昨今のこうした遺体に対する一連の儀礼は、必ずしもそうではない。例えば、湯かん業者による湯かんを依頼する遺族のなかには、「故人はお風呂が好きだったから、最後に入れてあげたい」という思いを抱く人も少なくない。少なくとも、業者に湯かんを依頼する遺族は、遺体を清めるべき存在として捉えているのではない。

3. グリーフワークと遺体の保全

しかし遺族は遺体に対するさまざまな儀礼をおこなう一方で、できる限り、早く荼毘にふしたいという、遺体に対する錯綜した感情を持っている。遺体の様相が刻々と変化することに対する恐れがあるからである。昨今、延命措置や高度治療によって遺体の腐敗スピードが速くなっていることも、その恐れを助長している。長期の闘病で面影が変わってしまった遺体が増えていることにより、遺族は、現実のこととして大切な人の死を受けいれにくいという問題も出てきている。多死社会の到来で、大都市部では火葬の予約が何日も取れないことが珍しくなく、衛生上の理由からも遺体を保存する機会が増えていく。

一方で、家族やごく親しい友人たちでの家族葬が増加し、故人の個性に重きを置いた葬儀が志向される傾向にある。葬送儀礼が社会的な儀礼ではなく、ファミリーイベントとして捉えられるようになると、いわゆる儀礼としての葬儀式ではなく、故人と参列者が告別をする時間が重視されるようになる。その結果、故人をその人らしく、美しく送ってあげたいという遺族の意向が顕著になっている。いわば、葬儀の告別式化の進展で、故人の個性や尊厳が尊重されるようになっているのである。

故人との最後の別れを存分にしたい反面、腐敗スピードが速い遺体を前に、遺族は一刻も早く骨にしていまいたいという、いっけんすると相反する想いの中で、普及しつつあるのがエンバーミングである。

日本ではエンバーミングは1988（昭和63）年に導入されているが、この年には191件しかなかったものの、2011年にエンバーミングされた遺体は2万3499件と、この20年間で100倍以上に増加している。アメリカにおける近代的なエンバーミングの普及は、1860年代の南北戦争で戦死した兵士の遺体を故郷に移送するために施されたことが契機となっているが、現在では死者の8割以上がエンバーミングされている。エンバーミングは、事故などで損傷した遺体を尊厳のある姿に再現できる、遺体からの感染を回避できるといった効用もあるが、それ以上に、遺体の様相の変化からくる恐れや穢れを払拭する効果大きい。こうしたことから、エンバーミングはグリーフケアの一つの方法になりうる。

実際、大切な人の死に顔は、遺された人の記憶に何年たっても残る。ひとり暮らしなどで死の発見が遅れた場合や、事件や事故で損傷が激しい遺体は、遺族に大きな衝撃と悲しみを与える。苦しそうにゆがんだ顔も、遺された人は脳裏から離れず、いつまでもつらい思いをすることが多い。

死別カウンセリングの第一人者である心理学者、J. ウォーデンは、遺族が取り組むべき課題として、①喪失の事実を受容すること、②悲嘆の苦痛をのりこえること、③死者のいない環境に適應すること、④死者を情緒的に再配置し、生活を続けることを挙げている。

遺体の損傷などからくる遺族への衝撃は、自責感などの強い感情を伴い、喪失の事実を受容しづらくするほか、死者を情緒的に再配置することも困難にする。

死後、刻々と視覚的な様相が変化する故人の尊厳を守ることは、単に衛生上の観点からはとされるのではなく、死穢のマイナスイメージを払拭させ、遺された者にとって死を受け入れやすくするためにも重要である。遺体に対するさまざまな儀礼とともに、生前の故人を遺体に再現することは、遺族のグリーフワークでもあるといえる。

引用文献

- 上野正彦 2008 『死体を科学する』 アスキー・メディアワークス
堀 一郎 1952 「我国に於ける火葬の民間受容について」『宗教研究』127
柳田国男 1990 「葬制の沿革について」『柳田国男全集12』 筑摩書房
波平恵美子 2006 「遺体」 新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小事典 死と葬送』 吉川弘文館